

## 西山宗因との出会い

島津, 忠夫

<https://doi.org/10.15017/4742037>

---

出版情報 : 雅俗. 14, pp.118-121, 2015-07-17. 雅俗の会  
バージョン :  
権利関係 :

## 西山宗因との出会い

島津 忠夫

### ◎プロフィール

- 生年月日 大正十五年九月十八日
- 卒論題目 心敬の立場―連歌史における遊びと文芸―
- デビュー論文 「連歌史に於ける心敬の位置」(「国語国文」昭和二十六年八月)
- 思い出の研究書(論文) 穎原退蔵著『俳諧史の研究』
- 研究以外の趣味 短歌、歌舞伎鑑賞、旅行(鉄道による)

大阪生まれの私は、大阪天満宮のことは母から天神祭の話などをよく聞かされていてなじみが深かった。京都大学で穎原退蔵先生の連歌史の講義を聞いたことから、先生が亡く

なられても連歌で卒業論文を書くことは決めていた。大阪天満宮に連歌の資料があることは戦前から知られていたもので、野間光辰先生の紹介で閲覧を申し出たことがあった。何分戦後のこととて、御文庫は残ってはいしたが戦災の爪痕もいちじるしく、お宮の方でもそんな余裕はなかったと見えてその折は叶わなかった。

卒業後、大阪府立市岡高校の教諭となつて、旧制大学院に籍を置いて(戦後の混乱期で黙認されていたようだ)一週間に一度研究日を貰って大学にも通っていた。そのころ、閲覧が許可されて、野間先生といっしょに天満宮へ行く。御文庫の南側に焼け残った部屋があつて、そこには誰かお宮に関係の人が住まっていたので、御文庫から、懐中電灯で探し出しては、御文庫の石段のあたりで広げてみたのだつた。それが岡延宗(南曲)奉納の

天満宮連歌叢書である。野間先生は当時西鶴から宗因に研究の焦点を移そうとされていたので、もっぱら近世の連歌を見て、とくに連衆に時々例の低い声で嘆声をあげておられたのを隣で耳にする。私はもっぱら心敬や宗抵の中世の連歌を見ていた。

それから数ヶ月も経ったころであつただろうか。天満宮の寺井種長宮司より市岡高校に電話があつて、建物を壊したら連歌が箱に一杯出て来たので見に来てほしいとのことであつた。私は放課後を待ちかねて、お宮に駆けつけて見ると、それが今から思えば滋岡家旧蔵書だつた。西山宗因の自筆の連歌を含む西山家伝来書はこの中であつた。もしこの建物が空襲で焼けていたら、これらの連歌は消失していたのである。思えば奇跡であつた。それから毎日、放課後に通い、一冊ずつカードを取り、カードといつても今のように完備

したものがあるはずはなく、ルーズリーフに必要部分を書き取って、それを紐で括って分類したのである。それは目録作成のためであった。その間、野間先生も岡見正雄先生も、木村三四吾先生も見える。木村先生は雑記ばかり見られてしきりに書き留められていた。私は何よりも目録の作成のためであったが、その折初めて西山宗因の自筆を目にして、まさきれいな気品のある字だなと思った。ときどき読むともなく目に触れる連歌が、中世の連歌よりも何となく新鮮さを覚える。これはぜひ詳しく比較してみたいと思いつながら、その当時はそう思っただけだった。いちおう整理が終わって、とりあえず主要な連歌作品の展覧目録（孔版刷り。野間先生自筆の序がある）を作り、今は服部天満宮に移っているが、当時天満宮にあった能楽殿で、天神像とともに展示された。野間先生の「宗因と正方」以下一連の宗因研究も、この新出の資料に基づいている。宗因はいずれ野間先生が全集を作成されることだろうと思つて、特に取り上げて研究することはなかったが、やはり宗因との最初の出合いがここにあったことはいまでもない。

その後、私は昭和三十三年九月に佐賀大学に赴任することになり、大阪から佐賀に移住する。ここでまたいくつかの宗因の資料に触れることになる。宗因が佐賀に來ているのである。その折はまだはっきりと足跡を知ることとはできなかったが、今は、「西山宗因年譜」〔『西山宗因全集』第五卷。尾崎千佳氏作成〕により、寛文九年のところを見ると、ほぼ辿ることが出来る。その中の田中道雄氏の紹介された連歌百韻の一座に加わっている蓮正寺の松夢が、当時佐賀大学の学生だった高木昭英君の先祖だったので、調査して松夢の宗因追悼文を見出したり、石川八朗氏らと伊万里に出向き、伊万里神社で聞いて訪ねた中村里山の子孫の家で偶然芭蕉の書簡が出て來たり、この頃は隙にまかせて資料調査をしたのだった。そうした中から生まれたのが「連歌と俳諧と——紹巴以後に関する一考察——」〔『国語国文』昭和四十年三月〕だった。それでもまだ宗因の作品には直接触れていない。昭和四十年九月に佐賀を去って愛知県立大学に移る。ここで、昭和四十九年度の演習に「梅酒十歌仙」を取り上げている。折から近世担当の森川昭氏が内地留学をされたので、近

世の演習も引き受けたのだが、これは、肥前鹿島の祐徳稲荷神社中川文庫で見いだした資料だった。しかし、この折の演習では、とてもその私解を公にする自信がなかったため、翻刻だけを「説林」（昭和四十九年十二月）に発表するに留めている。

その頃、新潮日本古典集成が計画され、私に『連歌集』の依頼があった。当初は百韻十二巻を収める予定であった。一つずつどこかで講義し、そのノートを新潮の別館に持ち込んで泊まり掛けて執筆し、一巻ずつ仕上げた。それが十巻まで終わったところで、すでに一冊分の分量に達していることと、早く刊行したいという社の意向で、後の二巻は切り捨てられることになってしまった。そのひとつが太宰府天満宮西高辻家藏の『実隆・公条両吟和漢聯句』であり、ひとつは宗因の独吟の百韻だった。『実隆・公条両吟和漢聯句』は、いちおう下書きまでできていたが、宗因の方は延宝二年七月十一日の「朝霧やのぼりての代の岡の松」を発句とする明石人麿社法楽の独吟を取り上げようと思っただけでまったく手をつけていなかった。

なお、私の名古屋在住時代の昭和五十二年に、『大阪天満宮御文庫国書分類目録』が出ているが、これには関与していない。中村幸彦先生から連絡があって、私の作った『大阪天満宮文庫連歌書目録』を使わせてほしいとのことであった。その目録は、私が佐賀に移ってから依頼があって、かつてのメモと帰省の折に通って何冊かずつ社務所にはるる運んで貰って作成したものであったので、誤りがあった。とくに宗因の自筆かどうかを判断するのにまとめて一気に見ることができなかったこともあって宗因の手に二手あるのではないかと思ったりした。それが誤りだったことはいくまでもない。この目録は「後記」に昭和三十八年五月八日と記しているように、その頃に出来ていたが、それが刊行されたのは昭和四十六年一月のことだった。『大阪天満宮御文庫国書分類目録』では、「大阪天満宮文庫連歌叢書」として、『大阪天満宮文庫連歌書目録』から和歌の部だけを他に移して、あとは誤りもそのままに収められている。「南曲奉納本」と「連歌作品集」に分けられているが、私は、「大阪天満宮連歌叢書」という名称は南曲奉納本にだけ用いることにしている

る。なお、私が武庫川女子大学で、俳文学会の事務局を引き受け、平成五年十月に第四十五回大会を催すに当たり、西島孜哉氏の提案で、大阪天満宮文庫本を借り出して展示することになり、改めて石川真弘氏に調査に立ち会ってもらって、この頃は研究所が御文庫の隣に出来ていたので、宗因関係のものは一気に出して貰って筆者を吟味した。したがって、『大阪天満宮文庫連歌書目録』の誤りは、その時の「大阪天満宮文庫展覧目録」（島津忠夫著作集第六巻『天満宮連歌史』所収）に拠って訂正してほしい。

昭和五十五年に大阪大学に移り、いつからか柿衛文庫の理事になっていたが、ある時の理事会で、「その他」の議題で、いちど西山宗因の展覧会をしてほしいと希望を述べた。それはその前の平成七年九月に柿衛文庫で「立圃から芭蕉へ」の展覧会があり、「芭蕉へ」とはあるが、もっぱら立圃中心だったので、宗因も可能だろうと思ったからだ。その発言は消えてはいなかったらしく、平成十七年十月の柿衛文庫から始まって八代市立博物館未来の森ミュージアム、日本書道美術館と廻っての「宗因から芭蕉へ」の展覧会として

実現することが出来た。当初は宗因の場合、短冊類が少なく壁面が寂しいのではないかと言われていたが、この企画が進行するうちに実に多くの新資料が出て来て、それは杞憂だった。さらに八代市立博物館未来の森ミュージアムで、平成二十二年に「華麗なる西山宗因」の展覧会が催され、地元の資料だけで、新しい多くの資料を含む立派な展覧会だったことには驚くばかりであった。

一方、『西山宗因全集』をといても早くから浮上っていて、石川真弘氏、尾崎千佳氏らと図って計画し、石川氏といっしょに尾形叻氏を訪ねて監修を依頼し、その足で八木書店に向いて、具体的な話をすることによりようやくその緒に付いたのであった。最初に第三巻の俳諧篇が出たのは平成十六年七月だったが、つぎつぎに新資料が出て、当初の予定の五巻が六巻になり、最後の第六巻が尾崎氏の努力により目下鋭意編集集中である。この編集に当たって感じたことは、宗因の俳諧は戦前からいちおう注目を集めていて、連歌の資料も紹介されてはいるが、その場合、年次と一順と、時に宗因の句が抜かれているだけで、その作品全体が翻刻されていないこと

である。現在所蔵者不明であったり、現在は閲覧不可能になっているものについては、その不完全な紹介に拠らざるをえなかったのである。それはとりも直さず戦前は伝記資料としてしか価値が認められていなかったことを示している。私はこの編集に関わってからは、内容に指定のない場合は、講演は宗因のことにして、その顕彰に勉めている。いくつかの論文も書いて、それは私の著作集の第十巻「拾遺・索引編」に収めたが、その後も「西山宗因と松坂」(「語文」平成二十五年十二月)を書いている。

最初に宗因の連歌が、中世の連歌と違って何となく異なった新鮮さを感じたのは、今になってようやく宗因は天性詩性のゆたかな人で、連歌においても俳諧においても紀行においても、宗因の作品自体がすぐれた文学だということと言えるようになったと思う。